

「手の働きの世界」試論

—手の働き研究の枠組みの検討から—

森 和夫 (職業訓練大学校)

The World of the Manual Function
Kazuo Mori (The Institute of Vocational Training)

1. 「手の働き研究」体系の枠組み

本論は体系化序論として考え方と方向を検討することを目的である。手の働き研究部会での議論は多様な学問領域から検討し、「手の働きの総合学問」を志向しているように思う。このように設定するとこれまでの前提、つまり「ヒト」や「人間と物とのかかわり」に限定する枠組みを棄却して新たな枠組みが求められているように思える。

ここでは手の働き研究を大きく2つに分けて領域を考えることにしたい。1つは「生体としての手」である。「個体であるヒト」を基礎に置いた領域を設定する。第2は「行為としての手」である。人間は生物であると同時に社会的な存在である。ヒトは社会を構成し、その活動を通して人間となる。この領域は手の働き研究の重要な側面を多く含む。

図1は手の働き研究の3つの層を表している。「生体としての手」は手の持つ基本的な性質を解明する部分である。「行為としての手」についてみよう。人間が行う活動の中で主要なものは生活に関わる行為であり、付随して文化やスポーツがある。他の主要な活動には労働がある。この両者は類似の手法で手の働き研究を進めることが可能である。

第1層は主要研究課題を示している。例えば生活の中の手の働きの様態を解明することや「行為と効率」を視点とする研究課題であろう。これらは第3層の「手の働き文化論」に結合する。さらに生活行為を合理化したり

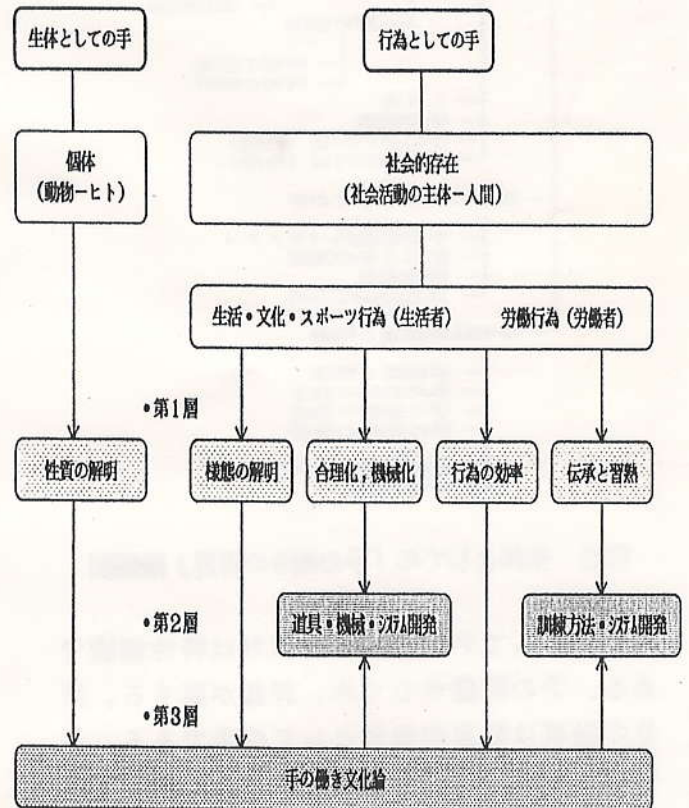


図1 手の働き研究の3つの層

機械化する視点で手の働きを検討したり、伝承や習熟を視点とする研究課題であろう。この両者は第3層からの支援を受けながら第2層の研究課題を検討する。

2. 「手の働きの世界」の具体像

この枠組みのもとでさらに個別に検討することにした。

図2は生体としての「手の働きの世界」の

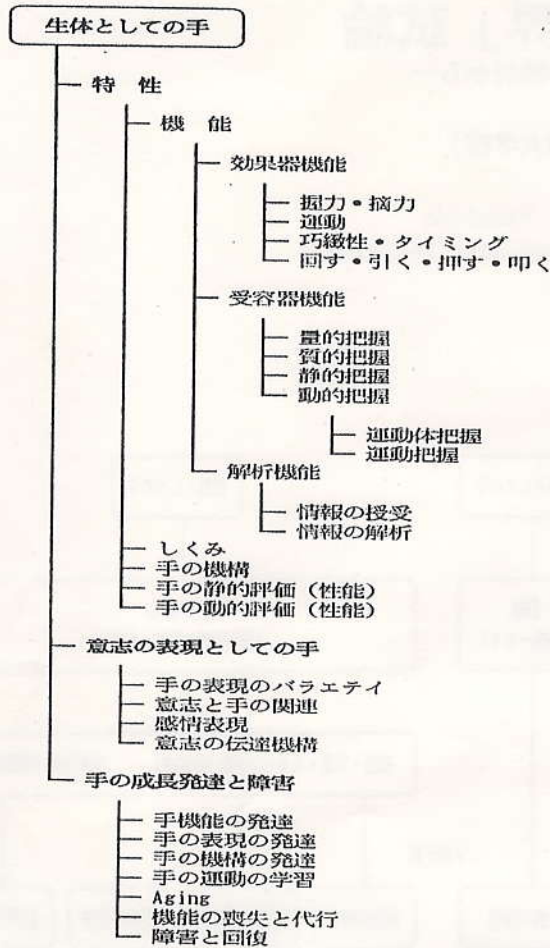


図2 生体としての「手の働きの世界」階層図

階層を示している。第1の領域は特性領域である。手の機能やしぐみ、評価が属する。第2の領域は意志の表現としての手である。手の表現や意志と手の関連を扱い、感情と手の表現を扱う。第3の領域は手の成長発達と障害の領域である。人間の能力の盛衰を扱う領域である。幼児の手の働きから高齢者の手の働きまで、この領域は発達やAging、障害等が主要テーマとなる。階層図は「機能」についてやや詳細に記述しているが「機能」以外にも同様に記述可能である。

行為としての「手の働きの世界」の階層図も同様に記述できるので、ここでは階層図の次の段階について考えることにしたい。

図3は労働行為の手の働き研究の枠組み例を示している。図2の「伝承と習熟」研究に

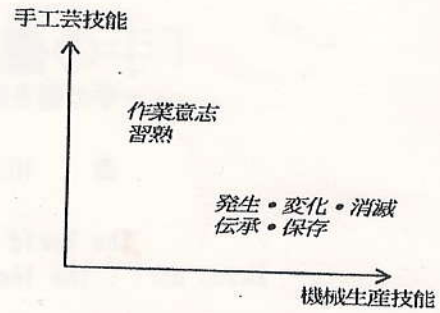


図3 労働行為の手の働き研究の枠組み例①

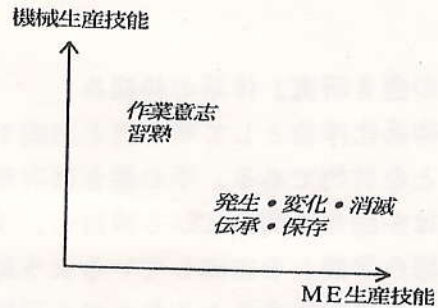


図4 労働行為の手の働き研究の枠組み例②

際して図のような枠組みを考えることができる。手工芸技能と機械生産技能の座標上で図に掲げた主要課題を検討するのである。ここで手の働きの実態が検討される。図4ではME生産技能軸を設定して検討する。このようにして他の多くの課題についても、「手の働きの世界」に接近できる。この課題を検討すると、「手の働き文化論」と密接に関連していることに気づくに違いない。これは図1の第3層とのやりとりが背後にあることによっているのである。

3. 「手の働きの世界」を描き出すもの

本論では「生体としての手」と「行為としての手」という2つの領域を設定して検討してきた。しかし、更に検討の余地があろう。例えば「生体としての手」と「行為としての手」の2軸で表されるような平面的なものではなく、「文化としての手」という第3軸を設定した3次元空間上で「手の働きの世界」を位置づけることも有り得よう。本論で示した仮説と推論を今後の手の働き研究の中で検証することにした。